

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770039

研究課題名（和文）現代トルコにおけるロマの音楽伝承をめぐる実態研究 スルクレ地区を事例として

研究課題名（英文）The Study on Music Transmission of Roma in Turkey: The Case Study of Sulukule

研究代表者

濱崎 友絵（HAMAZAKI, Tomoe）

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：90535733

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：イスタンブールのスルクレは、ロマの最古の居住地とされる歴史地区である。しかし2000年代に開始された都市再開発プロジェクトにより同地区一帯が取り壊されたことで、それまでロマ・コミュニティ内部でおこなわれてきた音楽教授が実質的に不可能となった。本研究は、このスルクレを事例に、一連の外的な環境変化の中から誕生したスルクレ子ども芸術アトリエの設立過程やスルクレ芸術アカデミーの活動実態等の検討を通して、スルクレのロマを取り巻く音楽伝承および「場」の変容とその諸相を明らかにすることを目指した。

研究成果の概要（英文）：Sulukule has been known not only as one of the oldest residential places of the Romani community but also as a birthplace of excellent musicians and dancers in Turkey. However, due to the urban redevelopment project that has started in Sulukule since the 2000s, most Roma musicians of Sulukule have lost the places to play and teach music in their community. This study explored the actual phase of this drastic change in the musical environment and of musical transmission of the Roma musicians of Sulukule by focusing on the establishment of the Sulukule Children Arts Atelier and the Sulukule Arts Academy.

研究分野：音楽学

キーワード：ロマの音楽と場の変容 トルコにおける音楽

## 1. 研究開始当初の背景

イスタンブールのスルクレは、ロマ(ジブシー)の最古の居住地として知られる歴史地区である。しかし2000年代から開始された都市再開発プロジェクトにより、同地区のロマ居住地は破壊され、ロマ・コミュニティ内部でおこなわれてきた伝統的な音楽教授が実質的に不可能となった。社会的マイノリティとされるロマたちが、社会や政治など「力の理論」が交差する中で、いかに自らの音楽およびその伝承に向き合おうとしているのか。

これまでトルコにおけるロマの音楽や楽師に焦点を当てた研究はきわめて数が限られており、さらに現在進行形で変容するロマの音楽状況について論じた研究は皆無に等しい。とりわけ今、スルクレのロマが試みる新しい音楽教授をめぐる模索や実践は、将来的にロマの音楽伝承および音楽そのものに影響を与えていく可能性が高く、その具体的な変容実態を把握し、整理、理解する必要性は大きい。本研究は、こうした状況に対し、ロマによる「新たな音楽伝承の形」に関わる問題について、民族学的フィールドワークと社会学的調査を通して検証することを目指すものであった。

## 2. 研究の目的

現在のトルコ共和国には、公式にはおよそ50万人のロマ(ジブシー)が居住しているが、その実数は200~250万人とも推計されており、彼らの多くが社会の成員に忌避される音楽や芸能一般、花売り、金属回収などの職に従事しているとされる。ロマは、トルコ社会において侮蔑や差別の対象となってきたが、一方で、ロマの音楽家たちはオスマン帝国期より祝祭や儀礼で大きな役割を果たし、民衆のエネルギーと根強い需要を受け止め、トルコの音楽シーンに欠かすことのできない存在となってきた。

トルコのロマが、現在に至るまで社会的差別に屈せず優れた音楽家を輩出し続けることができた理由のひとつは、彼らの音楽教育システムにあったといえる。近年では、正規の音楽学校に通うロマの子供たちも増えてきているとする報告もあるが、ロマは伝統的に小地区にまとまって居住し日常生活を共有する中で、一子相伝や口頭伝承で子供たちに音楽教授をおこなってきた。生活空間の中で日常的に音楽が鳴り響くロマ・コミュニティの存在そのものが、超絶技巧や即興を得意とするロマの楽師たちの音楽性を育てる「場」として機能してきたといえるだろう。

本研究は、こうしたロマの音楽教育を保証してきた「場」が消滅する中で、ロマの人々がどのように音楽に向き合おうとしているのか、そこでの音楽はいかなる「かたち」をとっていくのかという問いを出発点としている。とくにスルクレのロマを事例に、場と

音楽をめぐる相克の背景と過程を検討すること、そして「新たな音楽伝承の形」に関わる問題とその可能性を、現代トルコという社会的文脈に位置づけながら検証していくことが本研究の第一義的な目的であった。

## 3. 研究の方法

上述した研究目的を達成するために当初、主たる研究対象としたのが、2010年にスルクレ地区においてロマの手によって設立された教室(スルクレ子ども芸術アトリエ)であった。同機関においては、主にロマの子供たちを対象に五線譜の使用やソルフェージュなど西洋音楽教育システムが導入されていたため、ロマの音楽伝承をめぐる問題や葛藤が先鋭的に生じていることが予想されていた。しかし、研究期間中の2015年に同機関が閉鎖されたことにより、その実態調査が実質的に不可能となり、研究対象および研究計画の再検討が必要となった。

そこで、スルクレ地区全体をロマの音楽実践と伝承を保証してきた「場」と捉え直すことで研究の立て直しを図り、より広い観点からこの地とロマの音楽をめぐる諸相を整理、検証する研究調査へと軌道修正をおこなった。こうした流れを受け本研究は、対象とする年代を大きく二つ、すなわちスルクレ地区で伝統的な音楽継承がおこなわれていた時代(~2000年代) スルクレ撤去後の音楽教育機関(スルクレ子ども芸術アトリエおよびスルクレ芸術アカデミー)の設立(2010年代~現在)に区分し、大きく以下の三つの観点から整理と考察を試みた。

### (1) スルクレにおけるロマと音楽 (~2000年代)

スルクレ地区で伝統的な音楽継承がおこなわれていた時代(~2000年代)までを中心に、おもに二次資料に依拠しつつ、トルコ、およびスルクレにおけるロマの音楽についての基礎情報の収集と整理をおこなった。

そもそもロマの音楽は、口頭伝承により受け継がれてきたゆえ、通時的観点から音楽の実相をたどることはきわめて困難である。しかしそのような中でも、1951年にアンカラ音楽院のムザッフェル・サルソゼンが実施したスルクレのロマ音楽調査の報告、採譜例および録音資料は、学術的観点からきわめて貴重な資料と位置づけられる。本研究では、トルコにおけるロマの音楽を総覧的に整理したドゥイグル[Duygululu:2006]やギルギン[Girgin:2015]らの研究成果に依拠しつつ、サルソゼンの報告を読み解くことで、およそ60年前のスルクレのロマの音楽の一断面を照射し、ロマの音楽の特徴と実相を把握するための基盤となるデータを整理した。

## (2) スルクレ子ども芸術アトリエの設立 (2010年～2015年閉鎖)

2000年代から本格化した都市開発プロジェクトは、スルクレ地区のロマ・コミュニティを離散させ、口頭伝承を支えてきた音楽空間を消滅させることになった。しかし2010年、同地区にロマのための「子ども芸術アトリエ」が設立されたことは、スルクレのロマが音楽を「捨てていない」こと、一方で伝統的な口頭による音楽伝承から距離を置くことを世に示すことになったといえよう。本研究では、同アトリエの教育理念や設立背景、および教育内容を、二次資料に依拠しつつ整理し、同組織立ち上げにもかかわったスルクレ・ロマ文化振興連帯支部長のインタビューなども質的調査を介しながら、ロマによる音楽上での挑戦を象徴する同アトリエの特質の検討をおこなった。

## (3) スルクレ芸術アカデミーの設立 (2014年～現在)

スルクレが「ロマの街」から「新生スルクレ」へと変貌を遂げたことを象徴づけたのが、2014年のスルクレ芸術アカデミーの設立であった。上記スルクレ子ども芸術アトリエの閉鎖とほぼ同時期、かつ同アトリエにほど近いエリアに開校されたスルクレ芸術アカデミーは、広く子供から一般まで無料で各種音楽レッスンを提供する学校として行政主導で運営される機関となっている。本研究では、現地調査および同アカデミーのコーディネーターらとのインタビュー、新聞記事をはじめとする二次資料を通して、同アカデミーの理念と設立経緯を整理するとともに、スルクレ子ども芸術アトリエとの関係性を、「ロマの音楽教育」という観点から比較検討することを試みた。

## 4. 研究成果

### (1) スルクレにおけるロマ(～2000年代)

オスマン朝期から、ロマの楽師が儀礼や娯楽で欠くことのできない役割を果たしてきたことはすでに述べたとおりだが、現代トルコにおいても、彼らの重要性は変わっていない。ロマが奏でる音楽は、ロマ固有のレパートリー(とくにトルコ西部のロマに関連づけられる音楽)から、トルコ民俗音楽、ファスル(トルコ古典音楽を簡易化した形式をもつ音楽)、アラベスクを中心とするトルコ・ポピュラー音楽に至るまで〔Duygulu:2006〕、いわゆる「トルコ音楽」全般をレパートリーに収めている。ロマ達が上記音楽ジャンルに対応できるだけの楽器や音楽語法に通じてきたことは、歴史的に彼らがトルコの音楽シーンに欠くことのできない存在となってきたことの証左でもある。

イスタンブルには、カスムパシャ、クシュテペ、ガーズィオスマンパシャ等いくつものロマ居住地が存在するが、その中でもとくに

スルクレは、優れたロマ楽師および女性の踊り子(チェンギ)の輩出地としてオスマン朝期から知られてきた。20世紀に入ってから、ロマの楽師や踊り子は、スルクレのエレンジ・エヴレリ(娯楽場)やイスタンブルの酒場などで人々に娯楽を提供し続けていく。

こうしたロマのレパートリーの一部は、サルソゼンの1951年の調査記録から垣間見ることが可能である〔Senel:2010〕。当時、アンカラ音楽院のアーカイヴズ室長であったムザッフェル・サルソゼンは、音楽学者のハリル・ベディイ・ヨネトケンと録音技術者のルザ・イイエティシェンとともにスルクレでロマ音楽の調査をおこない、17曲を録音した。これらの楽曲はトルコ民俗音楽および地方の音楽およびロマ固有のレパートリーが組み合わさったものと考えられるが、ここで特徴的なのは、17曲のうち13曲すべてがロマの女性たちによってうたわれ、さらに楽曲の多くが結婚式のレパートリーとなっている点である。女性たちが打ち鳴らす楽器としてデフ(片面棗太鼓)やズィル(小型のシンバル)が含まれていることは、チェンギの伝統や踊りが1950年代当時のスルクレにおいてなお息づいていたことを示している。

これら一連の記録資料の検討を通して理解されることは、スルクレが、ロマにとって楽器や音楽の伝承を担保する「場」としてだけではなく、イスラーム文化圏にあって女性の音楽家や踊り子の存在や「生き方」を保証する空間としても機能していたことである。

トルコに生きるロマにとって音楽は、社会的蔑視や差別を「反転させる」ために必要な手段であり、だからこそオスマン朝期よりロマたちは、自らが所属できるコミュニティを各地に形成し、その中でロマ音楽を醸成させてきた。スルクレのロマにとっても自らが生まれ育ち所属する「場」は、生きぬくための「母なる地」であり、同時に一種の「コンセルヴァトワール(音楽院)」として機能してきたといえよう。

### (2) スルクレ子ども芸術アトリエの設立 (2010年～2015年閉鎖)

しかしながらスルクレは種々の問題も抱えていた。2000年代に入ると、老朽化した建物、不衛生な環境、就学状況の低迷など、これまでロマ・コミュニティに山積していた問題が一気に噴出することになる。2006年からスルクレでは徐々に撤去作業が開始され、2008年からはイスタンブル市、ファーティヒ区および集合住宅局(TOKİ)等の都市再開発プロジェクトの始動により、スルクレー帯の本格的な取り壊しが本格化していった。これら一連の行政介入の結果、住居を失った337のロマの家族は、郊外のタシュオルクを居住地としてあてがわれたが、その実態は家賃も高く、仕事もなく、ロマたちに厳しい現実をつきつけることになった。

結果的にスルクレの地は、2009年にはほぼ

取り壊しを終え、その上に新しくオスマン風のアパート 640 戸が建設されていき、完全に新しい街区に変貌を遂げることになる。

このような中で、2010 年にロマ主導で設立されたスルクレ子ども芸術アトリエは、音楽教授を軸に据え、イスタンブル・ヨーロッパ文化首都事務所、スルクレ・プラットフォーム、スルクレ・ロマ文化推進連帯支部そしてイスタンブル工科大学トルコ音楽学校（音楽院）の四つの団体の共同支援で設立された組織であった。同アトリエでの授業は、2010 年 7 月に開始され、教授科目はヴァイオリン、ダンス、読譜（五線譜）、リズム、ヒップホップ、英語の授業など多岐に渡り、子供たちは少なくとも一つの楽器を習得することが目指された。開設当時、合計 80 名の子どもたちが授業に参加していたが、2011 年には、毎週のレッスン参加者は 9 歳から 17 歳の合計 60 名となり、開設から一年を経た頃には、多少人数が減っていたとされるが、少なくとも同アトリエは、ロマの子どもたちが集う「新たな場」となっていたことが見てとれる。

ここで注目すべきは、同アトリエが、今までロマたちが目もくれていなかった「西洋的な」システムティックな教育を採用したこと、さらにイスタンブル工科大学音楽院の教員や卒業生といった、西洋音楽教育の恩恵を受けた音楽教師による授業展開を軸にしていた点である。スルクレが消滅した今、「親子」の継承が事実上不可能となった訳だが、ここに現在のスルクレという「場」と音楽をめぐる根本的な問題、すなわちロマの音楽を維持するためには、伝統的な教授法によって担保されるロマの音楽の本質を捨てなければならないというジレンマが存在するといえる。

なお 2015 年 8 月、開設から 5 年経った時点で同アトリエは閉鎖された。この閉鎖により、ロマの子どもたちへの音楽教授の道は完全に断たれたのか、あるいは今もなお、別の形で音楽伝承が続けられているの、将来的なロマ音楽の質的変容の可能性とともに今後の調査の課題となる。

### （3）スルクレ芸術アカデミーの設立

（2014 年～現在）

スルクレが「ロマの街」として歴史を刻んできたことは繰り返し述べた通りであるが、その歴史の上に「新生スルクレ」を象徴する機関が 2014 年に設立された。それがスルクレ芸術アカデミーである。同アカデミーの特徴は、趣味として学ぶ音楽クラスから、音楽院入学を目指すための専門的な音楽教育まで市民に無料で提供されている点にある。

ファーティヒ区長デミルは、当初、この芸術アカデミーが、ロマの子どもたちの教育を目指していることを明言していた。しかし提供されている音楽レッスンの内実をみると、

トルコ民俗音楽、トルコ古典音楽、西洋音楽など合計 29 クラスが開講されているが、ロマが演奏してきたズルナやダルブッカ、デフなどの楽器は教授対象となっていない。ヴァイオリンの授業はあるが、これは西洋音楽を演奏するための楽器と位置づけられている。つまり、こうした授業展開は、ロマの子どもたちが受講することをまったく想定していないか、あるいは彼らにいわゆる「ロマの音楽」ではなく、西洋音楽を学ぶことを求めているかどちらかであると考えられよう。現地調査やインタビュー調査を通して、同アカデミーは、ロマの子どもたちの授業参加を拒否している訳ではないものの、「ロマのための音楽学校」とは実質的になっていないことが明らかとなった。

ロマ自身が主導して 2010 年に設立したスルクレ子ども芸術アトリエも、2014 年に開校したスルクレ芸術アカデミーも、実際の教育対象者や教育内容はそれぞれ違うが、いわゆる五線譜を用いて西洋的な教授システムで授業を展開させようとしていた点で、同じ性質と方向性をもつ機関とみなすことができよう。しかしスルクレ芸術アカデミーは、設立理念でロマの子どもたちの教育を大々的に謳っていたが、実際にはロマを対象とした音楽教育はおこなっていない。この点から言えば、数百年に渡りロマの音楽や記憶、香りを「守り続けた」スルクレは、今や行政や国際社会の思惑や批判、破壊と再開発が交錯する一種の「闘争の場」となっており、もはや「ロマ音楽伝承の場」としての機能を果たしていないことが見えてくる。

上記の詳細は、拙稿「スルクレにおける音楽と場の変容——トルコのロマとその音楽に関する予備的報告——」（2017 年）において整理、報告をおこなった。

以上をふまえ、最後に今後の課題として大きく二点、挙げておきたい。一点目は、長期的な観点からロマおよびスルクレの「場」をめぐる展開と変容を追うことである。大胆な環境の変化に直面するロマたちが自らの活動を提示していく方法やそのインパクトなどの視点も加味して検証することは、現代のロマが新たな文脈の中で社会と接点を構築する過程の一断面を明らかにすることになると考えられる。二点目は、より広い視野の中に本研究を位置づけることにある。トルコには複数のロマ・コミュニティが存在し、かつオスマン帝国統治下にあったバルカン半島のロマ・コミュニティにもトルコ音楽の影響が波及していることがこれまで調査から明らかになっている。将来的にはトルコにおけるロマ音楽の伝承形態のみならず、バルカン半島の音楽にも影響を与えたアラベスクなどの音楽ジャンルや、これらに携わるロマ楽師などを検討対象に含めることで、トルコからバルカン半島一帯に至る音楽の結節点および交渉の問題を検証するための基盤を提供できると考えられる。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

濱崎友絵、「スルクレにおける音楽と場の  
変容——トルコのロマとその音楽に関する  
予備的報告——」信州大学人文科学論  
集 第4号(通巻51号)、2017年、21  
頁～37頁。(査読有)

6. 研究組織

(1)研究代表者

濱崎 友絵 (HAMAZAKI, Tomoe)  
信州大学・学術研究院人文科学系准教授  
研究者番号：90535733